

新横浜におけるグリーン・ストリート・マネジメントの成立過程と方法

Establishment process and methods of green street management in Shin-Yokohama

滝澤 恭平* 山口 敬太**

Kyohei TAKIZAWA Keita YAMAGUCHI

Abstract: The management of green streets, which enhances the quality of the environment and human amenities, can contribute to the improvement of a city's attractiveness and value. The objective of this study is to elucidate the factors that contribute to the establishment of green street management. To this end, the study employs a case study approach, focusing on the city of Shin-Yokohama, where local entities are engaged in effective and sustainable management practices. Green Street Management was established through a development process that expanded from a small initiative, the participation of diverse entities, and public-private partnerships to foster management entities. The techniques employed by private entities to promote landscape enhancement, exchange promotion, and human resource development included the formulation and dissemination of activity policies, project management, fundraising, and organizational management. Green Street Management was also established through variable planting management in accordance with planting goals, communication strategies that are accessible to pedestrians, and the cultivation of interest groups.

Keywords: *green street, green infrastructure, street management, public-private partnerships, walkable*

キーワード: グリーンストリート, グリーンインフラ, ストリートマネジメント, 公民連携, ウォークアブル

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

都市の街路空間の緑は、良好な景観形成、生物多様性向上、ヒートアイランド現象の緩和、雨水の地下浸透など、様々な都市環境の質を向上させる機能を持つ。特に不浸透面が多い街路空間では、緑化による植栽や土壌の機能を活かし雨水浸透貯留を行うことで、都市における内水氾濫や合流式下水道越流水による河川の水質悪化を緩和することが可能となる。一方、近年では自動車優先の都市構造から歩行者が「居心地が良く歩きたくなる」¹⁾ まちなかづくりへの転換が進められ、道路空間にも人間中心のデザインが求められるようになり、街路空間と沿道空間（民地も含む）を併せて魅力的なまちなみを統合的に形成する「ストリート」²⁾ のデザインと管理運営や活用等のマネジメントが求められている。そのような状況の中、ストリート空間において緑化による環境の質の向上と、人間にとってのアメニティの質向上を両立させる「グリーン・ストリート」を形成し、マネジメントすることは、まちの魅力づくり・価値向上に有効である。グリーン・ストリートとは、米国環境保護庁（EPA）の定義では、雨水管理を行う植栽や土壌等のグリーンインフラ要素から構成された道路空間で、環境と人間の健康を実現するものとしている³⁾。環境改善以外にコミュニティの居住性や美観の向上にも使用できるとされる。グリーン・ストリートは、まちなかに戦略的に配置・連結され、歩行者や自転車等の交通計画と統合されることも多い。2021年には、EPAによるグリーン・ストリートの計画デザイン手法が解説された *Green Streets Handbook*⁴⁾ が公開され、自治体レベルでもガイドラインの発行が行われている。本邦においてグリーンインフラは雨水管理のみならず、自然の多様な機能を発揮させるものと定義⁵⁾、普及されており、本研究においてグリーン・ストリートとは、「雨水管理も含む緑の多様な機能を発現させ、環境の質と人間のアメニティの質を向上させる統合的なストリート」と定義する。グリーン・ストリートは、整備後の管理運営により、良好な緑とアメニティの質を維

持することが必要であり、「グリーン・ストリート・マネジメント」に関する知見を深めることが重要である。なお、グリーンストリートは、街路空間に加え民地も含めた沿道空間を対象とする。

日本においても街路空間の緑によって、環境、アメニティの質を高める魅力あるストリートは多い。一方で、雨水管理も含めた緑の機能を発揮させている街路空間は、京都市の歩道における雨庭などいくつかの事例が存在するもの、デバイス単独でストリートの一部に設置されたものが多く、ストリート全体、あるいは複数のストリートが組み合わせり街区単位で実現しているものは極めて少ない。そのような中で、新横浜2丁目エリア（神奈川県横浜市）は、雨水流出抑制機能と魅力的な植栽空間を持つグリーン・ストリートを街区単位で実現させており、マネジメントにおいても地域の企業町内会が道路協力団体となり、街路空間での広告看板事業や植栽管理、交流創出などの自律的な管理運営を行っている。本グリーン・ストリートは、短期的に成し遂げられたのではなく、20年以上に渡る地域主体による継続的な取り組みによって実現された。本研究では、グリーン・ストリート・マネジメントの優良事例として新横浜を取り上げる。地域主体により街区単位で魅力的なグリーン・ストリートを生み出す適切なマネジメントがなされていることが選定理由である。本研究の目的は、新横浜において適切なグリーン・ストリート・マネジメントが成立した要因を、その成立過程および管理技術の分析から明らかにすることとする。

(2) 既往研究

グリーン・ストリートに関する研究はポートランド市における制度、整備に関する花井・遠藤⁶⁾、福岡・加藤⁷⁾の研究がある。これらの研究ではマネジメントを扱っていない。グリーン・ストリートに関する地域主体の研究として、ニューヨーク市での滝澤・渡辺⁸⁾の研究、京都市の雨庭導入に関する前田ら⁹⁾の研究がある。これらの研究は実現過程を扱っておらず、後者は街区単位での分析でない。ストリートのデザイン、マネジメントに関する研究では、野原・釣¹⁰⁾のストリートデザインマネジメントに関する研究、

*株式会社ハビタ **京都大学大学院地球環境学堂

野原¹¹⁾のストリートマネジメントの主体形成の研究があるが、グリーン・ストリートを対象としていない。本研究は、地域主体によるグリーン・ストリート・マネジメントの実態を、その成立過程、マネジメント方法を分析することを通して解明することに独自性がある。

(3) 研究の方法

ヒアリング調査、文献調査、現地踏査を実施し、分析を行った。ヒアリング調査は、新横浜町内会の美化環境部の青木洋一郎長（奈良造園土木代表）、臼井義幸氏に2021年3月4日および2024年7月2日に、東邦レオの尾畑洋一郎氏に2024年7月2日、2024年8月22日に行った。文献調査では、臼井氏提供の町内会環境活動年表、町内会だより、ガーデンシティ新横浜計画書、設計図書、その他提供の資料を用いた。現地踏査では、緑化施設の位置、植栽、構造等の記録と撮影を行った。

論文の構成として、2章のグリーン・ストリート・マネジメントの成立過程、3章のグリーン・ストリートの構成と景観の特徴の分析を踏まえ、4章でグリーン・ストリート・マネジメント技術と方法を分析・整理し、5章でまとめとして結論を述べる。

2. グリーン・ストリート・マネジメントの成立過程

(1) 初期期／新横浜公園原風景再生期（1990年～1997年）

成立過程においては、地域主体の萌芽、形成・確立、発展という三段階が見られた。よって、野原¹⁰⁾のストリートマネジメント主体形成の3段階（初期期、主体形成期、主体発展期）を参照し、本地域での緑化の段階と併せて整理し分析を行った。

本地区は、新横浜北部地区土地区画整理事業（1965～1975年）によって基盤整備がなされた。ストリートに関わる主体が出現したのは、企業町内会である新横浜町内会の発足（1985年）以降であるので、本研究ではそれ以降を成立過程として分析した。

町内会では、若手の勉強会として講演・意見交換会の「街づくりフォーラム」を1990年から実施し、まちのビジョンを継続的に議論した。フォーラムで、まちに植樹する活動が注目されるが、当時はまちなかに植栽可能な空間が限られており、まずは紙りサイクル活動を町内会の環境活動として開始した。また、企業祭で植木市を開催した。

若手らは、金太郎飴でない街づくりの方法として、まちのオリジナリティとしての原風景の姿を探る中で、鶴見川の氾濫原としての新横浜の土地の履歴をポジティブに転換することを考えた。まちに隣接する氾濫原に建設予定の鶴見川多目的遊水地には、大型スタジアム、市内最大の総合運動公園・新横浜公園が開設されることが計画されていた。町内会美化環境部の臼井氏は、鶴見川流域ネットワークからの流域団体とも交流を持ち、建設予定の新横浜公園に関して、原風景を重視した公園である「ウエットランドパーク構想」を1993年に構想した。ここでいう原風景とは遊水地建設予定地付近の湿地帯を指し、様々な野鳥が生息、飛来し、当時の予定地にバードウォッチングが盛んであった。そのような鶴見川がもともと持っていた湿地環境のランドスケープを公園に取り入れたエコロジカルなデザインを重視した公園ビジョンであった。1996年には本構想は町内会により掲載された。地元市民団体の「ウェルパス」として公園設計への提案を行い、国交省京浜河川事務所、横浜市と協働で建設地での小型湿地造成実験が行われた。

また、町内会の活動として街路のゴミ拾いを行うなかで、ゴミを捨てにくい環境づくりとして街路空間に花を植え、日産スタジアム開設後にイベント時来街者を歓待する彩りの緑として整備するビジョンが生まれ、まちなか緑化実現へ向けた動きも始まった。

この期間は、町内会発足後に、若手が集まりまちのビジョンを探る中で、緑の価値に気づき、町内会において環境活動を担う主体のベースが形成された時期であった。一方でまちなかの植栽可能

空間は限られており、鶴見川多目的遊水地に建設予定の新横浜公園の「原風景」としての湿地再生への関与を深めながら、開設が近づく巨大競技場の来街者を花でもてなすグリーン・ストリート構想が萌芽した時期であった。

(2) 主体形成期／街路・沿道緑化推進期（1998年～2017年）

1998年には日産スタジアムが竣工し、神奈川県国体会場として利用される。町内会は、スタジアムへの来訪者を花で迎える「彩り・みどり新横浜」プロジェクトを開始し、スタジアム通りへハンギングバスケットを飾る緑化ボールの設置、民地の壁面後退部へのコンテナプランターの設置を行った。これらの整備費用は都市緑化基金より捻出された。一方で、維持管理においてボランティア団体による管理水準の違いが課題となり、コンテナプランターを集約して管理を行うようになり、仕事としての維持管理の仕組み構築の必要性が認識された。

2005年にはレンガ通り（現F・マリノス通り）が横浜市道路局（以後、道路局）のアダプト制度である「ハマロード」に認定される。以降、町内会がハマロードサポーターとして、住民、在勤者を巻き込み、レンガ通りの清掃を担うようになった。2006年、新横浜公園が一部開園する。町内会は他団体と協働で公園内にバタフライガーデンの整備と維持管理を支援した。また、JRA ウィンズ（競馬観戦施設）が町内に2008年に開業したことにより、JRAからの環境対策費を町内会の緑化活動に関する財源として活用できるようになった。2010年には、ミツバチを呼び寄せるハッチー花壇をレンガ通りに設置する。この花壇は、2km程離れた新横浜公園のバタフライガーデンからのハチ、チョウ等の誘致を目的に、環境対策費により整備され、横浜国立大学などのボランティアと協働で維持管理が行われた。さらに2011年に環境対策費を用いてレンガ花壇が拡張整備された。2017年には、新横浜公園に、ガーデンデザイナーのポール・スミザー氏のデザインによるワイルドフラワーを使い、原風景を活かしたメドウガーデンが整備された。

この時期は、日産スタジアム、JRA ウィンズなどの集客施設開設の機会を捉え、まちなかに民地、街路空間の両面から緑の基盤整備を進めた時期であり、鶴見川遊水地での「原風景」を活かした公園づくりと、まちなかの花壇を生物回廊として連携を試みた時期であった。一方で、緑化施設は、まちなかに点在しており、全体として連結されたネットワークに至っていないこと、新横浜公園などまちの中心から離れている緑の取り組みが認知されにくいことが課題として挙げられる。町内会の臼井氏が「おれたちのまちは急流の通りみちでなく、せせらぎ、溜まりがある通りへ」と語るように、まちが駅前からスタジアムまでスポーツイベント時の大量の観戦客の通り抜け動線として存在するだけでなく、見どころや滞留空間としての魅力を緑によって街路空間に産み出すことが、町内会が共有したグリーン・ストリートのビジョンであった。

主体の展開の観点から見ると、ハマロードサポーターの活動が始まり、道路に関する地域協働が広がったことや、大学生と協働で生物多様性向上を目的とした花壇を管理するなど、様々な主体との協働が生まれ、街路・沿道空間における緑の管理に関するノウハウが新横浜町内会にストックされていった時期であった。

(3) 主体発展期／公民連携緑化推進期（2018年～）

2018年に、新横浜町内会は条例に基づく「地域緑のまちづくり事業」実施に関する新横浜二丁目地区地域緑化計画として「ガーデンシティ新横浜」計画を公表する。本計画の骨子は以下3点である。①民有地での緑化推進と隣接公園との連続性による、F・マリノス通りを緑のシンボル軸とした「まるで公園の一部であるかのような街並みとしてのガーデンシティ横浜」の実現。②横浜市環境創造局（以後、環境創造局）整備予定の街路植栽帯レイナーガーデンと民間緑化との連携、町内会の植栽管理やハマロードサポーター管理範囲拡張などの公民連携。③「ガーデニングを楽しむ人々

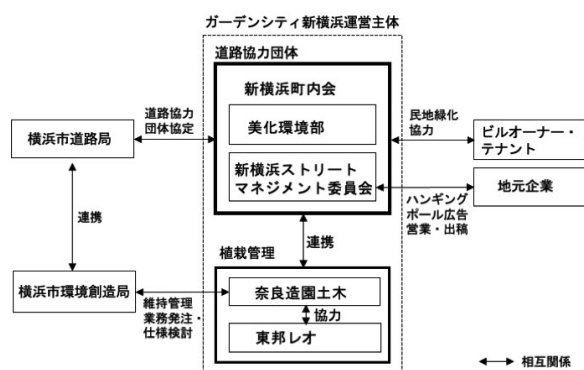


図-1 ガーデンシティ新横浜PJの体制

「いるまちの日常風景」を創出する、緑を軸としたコミュニティ形成。本計画の意図としては、日産スタジアムが会場となるラグビーワールドカップ、東京五輪を迎えるにあたり、これまで町内会が蓄積してきたグリーン・ストリートに関する取り組みとビジョンを踏まえ、環境創造局との公民連携事業として3年間の緑化整備事業、維持管理、広報、研修に渡る民間緑化実行計画をまとめ実施するものである。イベント期間終了後には町内会が受け皿となり、グリーン・ストリートのストック形成を集中的に図るものであった。ガーデンシティ新横浜PJの体制を図-1に示す。

2018年、環境創造局によりスタジアム通り、中央通り、F・マリノス通りにレインガーデンが整備された。2019年には民地緑化が開始し、新横浜駅前デッキ接続階段の正面に位置する民地ビル壁面に広告看板付きグリーンウォールが設置された。また、環境創造局による緑化ポールの増設が行われた。環境創造局はプロポーザルとして、街路植栽の維持管理業務を公示し、地元企業である奈良造園土木が受託し、東邦レオが協力する形で植栽管理を行っている。緑化ポールでの地元ハンギング教室の作品展示が好評であったことが契機となり、全国区のハンギングコンテストが2020年より行われ、来街者増加やSNSでの情報拡散に寄与している。

2022 年には新横浜町内会が道路局より道路協力団体に認定され、町内会内に「新横浜ストリートマネジメント委員会」が発足し、緑化ポールの広告看板事業を開始した。委員会は地域企業の二代目経営者など若手により形成され、世代交代が行われた。道路協力団体は、利用者の利便増進に資する工作物の設置・管理が認められており、広告物の場合は、占用使用料を道路局に支払っている。ただし道路協力団体として全てでないが減免措置がある。

2023年から2025年は、横浜市都市整備局「新横浜都心まちづくりビジョン」策定期間であり、2027年市開催の国際園芸博も睨み、さらなるまちの将来像に関する議論を町内会は重ねている。

本期間は、「ガーデンシティ新横浜」計画を軸として公民連携による街区全体でのストリート緑化が推進された時期であった。民地緑化と街路緑化整備が連携し、まち全体での統合的なグリーン・ストリートが実現した。また、地域主体の観点からは、新横浜町内会が道路協力団体に認定され、緑化ポールを活用し広告事業を行い、新横浜地区緑化育成業務終了後も維持管理費用をまかなうことを目指し、自律的、持続可能なグリーン・ストリートのマネジメントを行う主体として確立するに至ったフェーズである。

3. グリーン・ストリートの構成と景観の特徴

(1) グリーン・ストリートの全体配置

グリーン・ストリート全体配置図と構成一覧を整理し、図-2に示す。グリーン・ストリートの全体の配置は、新横浜駅連絡デッキからスタジアム、病院、新横浜公園へ至る歩行者動線に基づき配

置されている。ストリートごとに異なるテーマのガーデンが設定され、互いに連結され、歩行者はテーマが切り替わるシークエンス景観の変化を楽しみ、まちを回遊することができる。特にF・マリノス通り、新横浜中央通り、スタジアム通りのクランク状のメイン動線は、駅前デッキとつながるエントランスの華やかな花の空間から、和の空間、宿根草地ナチュラルガーデンへとストリーートのテーマが切り替わり、飽きさせない工夫がなされている。

市整備の街路空間上のガーデンは、スタジアムメイン動線上に整備が集約されている。まちを横断する新横浜中央通りから新横浜駅前公園へ向かう通り 5 本のうち 4 本は緑化施設が設置され、隣接する公園の緑との連続性が強化されている。

ハンギングポールは、街路ガーデン整備の有無に関わらず設置され、まち全体に広がりを見せている。ガーデン整備がない通りへのポールの設置は、人通りが多い通りが選定されている。民間のコンテナグリーンはスタジアム動線とラーメン博物館の通りに集中して設置され、用途としては店舗が多いことが特徴である。

(2) グリーン・ストリートの構成要素

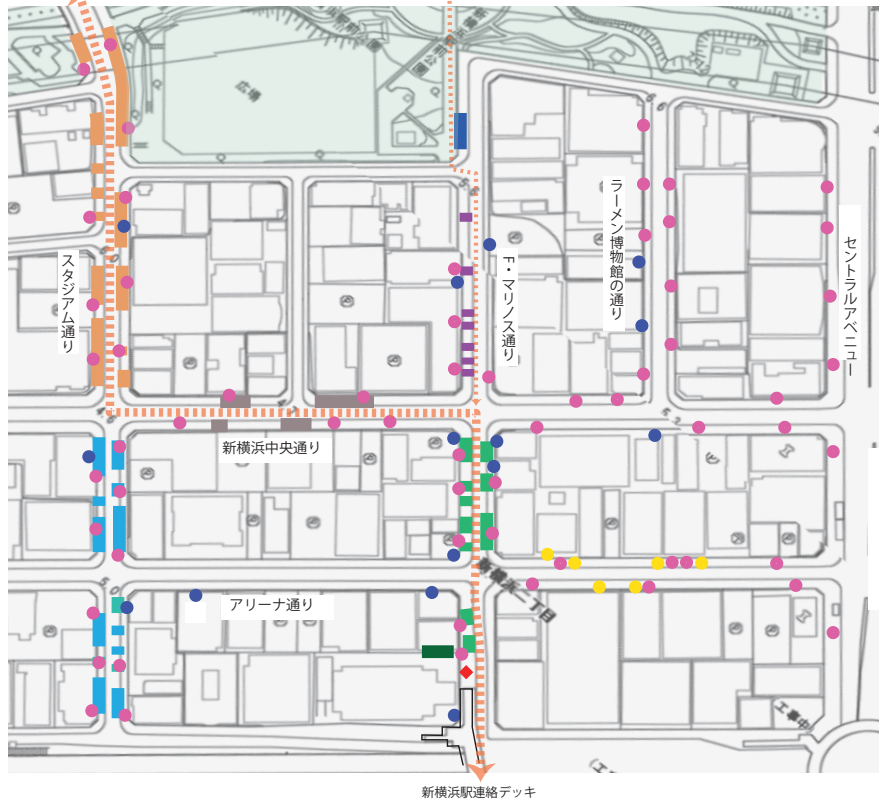
グリーン・ストリートを構成要素として a) から j) までの合計 11 要素を抽出した上で、植栽タイプ、設置空間、創出する緑の風景、主な植栽、植栽の高さ／ボリューム、植栽管理頻度、雨水流出抑制方法、管理者、管理実施者の各項目によって整理し、図-2 の下表にまとめた。植栽タイプは、ガーデン・植栽のタイプ分類を行った。設置空間では、街路空間、沿道空間に区分した。創出する緑の風景は、各構成要素が創出を狙う風景テーマを記述した。主な植栽は要素別に代表的なものを記した。植栽の高さは高／低、ボリュームは大／中／小の段階に分類した。植栽管理頻度は、高：春秋に週 4～5 回程度、中：週 2～3 回程度、低：週 1 回以下の 3 段階で分類した。雨水流出抑制の手法については、道路面集水から表面の浸透まで様々なタイプが存在した。それぞれの集水方法や貯留方法について記述した。管理者は施設の管理責任者、管理実施者は実際に施設の維持管理作業を実施する主体を特定した。以下にそれぞれの構成要素の景観の特徴を雨水管理、植栽管理と併せ説明する。

a.集水型レインガーデンは、車道縁石を切り抜き、雨水樹と有孔管を通してレインガーデン内貯留層へ導水し、車道表流水を積極的に貯留浸透させることを意図したもので、冠水に耐性のある植生を新横浜公園内で冠水するメドウガーデンを参考にして選定しており、雨を感じさせる風景を植栽管理で演出している。

b. ナチュラルガーデンは、宿根草主体のワイルドフラワーにより、季節ごとの花や葉、穂の色や動き等の高草草地の風景が楽しめるガーデンで、植栽の高さがアイレベルに近く、ボリュームの大きい、最も変化に富んだシークエンス景観を提供する。b.は、まちなかから公園を抜けスタジアムに向かうスタジアム通りに位置し、平常時でも病院へ通院する高齢者が多いことから、高齢歩行者をターゲットに、四季の変化を感じる柔らかな草地環境が、切り戻しや植替え等の植栽管理により維持されている。苗の一部は新横浜公園のメドウガーデンから提供されている。

c.和レインガーデンは、ワールドカップラグビーなどの国際イベントで来街する海外客をもてなす和の設けをテーマにデザインされている。一部にストリートファニチャーとしてコンテナチェアも設置されたが、五輪後に撤去され、町内会により再設置予定である。流出抑制手法として、縁石を切り欠き車道からの表流水と、歩道からの表流水の窪地貯留、浸透を行っている。

d. レンガ花壇ガーデンは、新横浜駅からのエントランス部に位置し、来街者を季節の華やかな花で魅せるレンガで組まれたレイズドベッドガーデンである。緑化ポールや民間コンテナグリーンとの相乗効果により目線の高さに近い緑化を実現している。花壇ではバラも含む様々な花の管理があり、植栽管理頻度は高く春秋には週4～5回程度である。流出抑制機能は、レンガ端部切り欠き



植栽タイプ	a.集水型レインガーデン	b.ナチュラルガーデン	c.和レインガーデン	d.レンガ花壇カーデン	e.林床カーデン
現地写真					
設置空間	街路空間（歩道）	街路空間（歩道）	街路空間（歩道）	街路空間（歩道）	街路空間（歩道）
創出する緑の風景	冠水しても耐えうる植物を中心に、雨水を想起させる風景を創出。	宿根草のワイルドフラワーにより、四季ごとの花が楽しめるナチュラルガーデン。	和の敷いで海外客をもてなす植栽。コンテナチェア（現在撤去）で休憩できる空間。	華やかな花で来街者を迎える、街のエントランスとなるレイズドベッドガーデン。	ケヤキの樹冠の木漏れ日が差し込む、樹林の林床を想起させるシェードガーデン。
主な植栽	アジサイ（アナベル）、ステイバ、イベリス、ニューサイラン等	エキナセア、サルビア、モナルダ、ルドベキア、ワイルドストロベリー	パイカウツギ、フウチソウ、ツワブキ、ミソハギ等	ユーフォルビア、トレニア、ペンタス、カラジウム、ガウラ、バラ等	クリスマスローズ、ノシラン、ヒューケラドルチェ等
植栽の高さ／ボリューム	高／中	高／大	低／中	高／大	低／小
植栽管理頻度	高	高	中	高	低
雨水流出抑制の方法	縁石を切り欠き、雨水側を通してガーデン内に導水。植栽基盤下に砕石貯留層と有孔管。	表面への降雨、歩道からの表流水を浸透	車道の縁石を切り欠き、ガーデン内に導水。歩道表流水の窪地貯留。	歩道のレンガ花壇を切り欠き、花壇内へ導水。植栽基盤下に砕石貯留層。	歩道のレンガ花壇を切り欠き、花壇内へ導水。植栽基盤下に砕石貯留層。
管理者	横浜市環境創造局・道路局	横浜市環境創造局・道路局	横浜市環境創造局・道路局	横浜市環境創造局・道路局	横浜市環境創造局・道路局
管理実施者	奈良造園土木、東邦レオ、新横浜町内会	奈良造園土木、東邦レオ、新横浜町内会	奈良造園土木、東邦レオ、新横浜町内会	奈良造園土木、東邦レオ、新横浜町内会	奈良造園土木、東邦レオ、新横浜町内会
f.町内会レインガーデン	g.グリーンファサード	h.ハンギングボール	i.民地コンテナグリーン	j.歩道コンテナグリーン	k.マルシェ台
					
街路空間（歩道）	沿道空間（民地）	街路空間（歩道）	沿道空間（民地）	街路空間（歩道）	街路空間（歩道）
公園入口のアイストップとしてのナチュラルなレインガーデン	駅からの来街者を迎えるアイストップとして緑量ある壁面緑化。	四季のハンギングで街色をとりどりに演出。広告看板が付随。	民地の建築後退エリアに置かれ、店舗の入口と歩道を彩る緑。	町内会、住民、ワーカーとのタッチポイントとしての緑。	まちの玄関口でガーデニングが日常の町を演出するインフォメーションボード。
シモツケ（ゴールドフレーム）、キャットミント、エキナセア等	ヘデラ、テイカカズラ、オタフクナンテン、ヤツデ、オオイタビ等	多肉類、ハンギングバスケット	ストレチア、ヒメセキショウ等	ハーブ類、イチゴ等	カラジウム、オレガノ、トレニア等
低／中	高／大	高／中	高／中	低／小	低／小
低	低	中	低	中	高
横断側溝から地下埋設管によりガーデンに導水	—	—	—	—	—
横浜市環境創造局・道路局	民間（ビルオーナー）、新横浜町内会	新横浜町内会	民間（ビルオーナー、テナント）	新横浜町内会	新横浜町内会
新横浜町内会	新横浜町内会、奈良造園土木、東邦レオ	新横浜町内会	民間（ビルオーナー、テナント）	新横浜町内会	新横浜町内会、奈良造園土木、東邦レオ

図-2 グリーン・ストリートの全体配置と構成要素

表-1 グリーン・ストリート・マネジメントの技術・方法の一覧

マネジメント分類	項目	内容
a.経営	a-1.活動方針の策定・共有	ビジョン構想、マスタープラン策定
	a-2.事業運営、資金調達	広告事業創出・運営、緑化・工作物計画、予算管理、助成金獲得
	a-3.組織運営	維持管理・活動の実行部隊の組成、活動の体制構築
b.維持管理	b-1.植栽管理	タイプ別の植栽目標を実現する植替え、切り戻し、除草、施肥、病虫害防除、灌水
	b-2.工作物管理	占用工作物の管理・設置
	b-3.清掃	歩道、植栽地の清掃、見回り
c.交流創出・人材育成	c-1.イベント運営	ターゲットに合わせたイベント企画・運営
	c-2.情報発信	情報台の街路設置、歩行者へのコミュニケーション規範共有、意見箱、SNS発信
	c-3.ボランティアプログラム運営	プロによる植栽管理講習、定期的な植栽管理ボランティア受け入れ
	c-4.グリーンガイド	ガーデンツーリズム

により歩道表流水を導水し、砕石貯留、浸透を行う。

e.林床ガーデンは、ケヤキの樹冠の木漏れ日が差し込む、樹林の林床植物の風景を演出するシェードガーデンである。公園と連続させることで滲み出しの緑を演出している。

f.町内会レインガーデンは、公園入口に植栽のアイストップとして設置されており、園路表流水を横断側溝で受けとめ集水枿を通して導水し、浸透貯留機能付き植栽基盤に貯留・浸透している。

g.グリーンファサードは、駅連絡デッキを降りてすぐアイストップとなる緑量感のある民地壁面緑化であり、広告看板と一体化している。h.ハンギングポールは、ハンギングを2個吊るすことが可能な金属ポールであり、アイレベルの緑を実現し、広告看板も設置されている。i.民地コンテナグリーンは、建築後退区域に設置され、店舗等の入口を彩ると共に、ストリートにアイレベルの高い緑を提供している。j.歩道コンテナグリーンは、新横浜ストリートマネジメント委員会が設置・管理しており、散水ジョウロも設置され委員会と住民とのタッチポイントとして機能している。k.マルシェ台は、駅連絡デッキ出口前の歩道に設置され、来街者へ「ガーデニングのある日常」を印象付ける情報提供スペースとして、ガイドマップ、アンケート箱、寄植えなどが設置されている。なお、j.とk.は、道路管理者は道路局であるが、占用許可を得て町内会が設置しているものである。

4. グリーン・ストリート・マネジメントの技術と方法

(1) 経営

グリーン・ストリート・マネジメントの段階としてA.施設・植栽などの維持管理、B.景観の高質化、C.交流創出・人材育成が考えられる。A.は行政が最低限行わなければならないもので、補助事業の対象となるもの、B.は民間が主導して行うこと、C.は民間によるさらなる取組みと想定される。グリーン・ストリート・マネジメントの実施にあたりA.と併せて、B.とC.を進めるとなった際は、地域主体である民間は、資金を確保し事業を運営する「経営」の観点が必要となる。よって、本事例におけるグリーン・ストリートのマネジメントの技術と方法に関しては、事業運営を行うa.経営、施設物の管理を担うb.維持管理、c.交流創出・人材育成の三点に論点を分類し分析を行った。表-1に整理した内容を示し、以下に詳細を述べる。

a-1.活動方針の策定・共有では、ウェットランドパーク構想や新横浜ガーデンシティ計画など、まちの未来ビジョン構想や地域マスタープラン策定が行われていた。ビジョン・方針が関係者と共有されていることにより、スタジアム建設やワールドカップ開催などの外部機会をうまく取り込みながら、個別の整備や財源を統合して新横浜らしいグリーン・ストリートを実現することが可能となっていた。また、ビジョン・方針の核心は継承されつつ、外部環境変化、世代交代に併せて内容・表現は更新されていた。

a-2.事業運営・資金調達では、公金に依存せずに持続的なストリートマネジメントを行うための自主財源確保に向けた事業創出・運営が行われた。町内会が事業創出したハンギングポール看板広告事業では地元企業への積極的な提案、営業が行われ、現在では78基のうち半数は広告出稿者が付いている。ハンギングコンテスト実施によるSNS拡散やレベルの高いハンギングの設置が広告主に訴求したという。年間の広告費の売上は、年間町内会費と併せて維持管理費としてプールされる他、新たな工作物の設置にも充てられており、撤去されたコンテナチェア再設置や、コンテナプランター新設置、太陽光発電による雨水灌水システムの導入が計画されている。これらの予算配分決定を含めた事業運営によって、地域で自律的にグリーン・ストリートの維持管理、景観の高質化を行う土台が築かれていた。また、ハード整備の資金調達としては、都市緑化基金によるコンテナプランター、緑化ポールの設置、JRA環境対策費によるハッチー花壇、レンガ花壇設置、環境創造局の地域緑化活動支援助成金による緑化ポール増設、グリーンファサード設置などの助成金獲得が行われており、これらの財源を組み合わせ、段階的なハード整備を推進してきたことが分かる。

a-3.組織運営では、ハマロードサポーター、道路協力団体としての町内会の認定登録や、マネジメント活動の実行部隊としての若手による新横浜ストリートマネジメント委員会の組成、植栽管理に関する3年更新の市プロポーザル発注による地元造園企業受注や協力会社も含めた維持管理体制づくりなど、維持管理・活動の実行部隊の組成、活動の体制構築が行われていた。

(2) 維持管理

b-1.植栽管理では、植栽デザインの方針を実現させるため、植え替え、切り戻し、除草、施肥、病虫害防除、灌水などを通して、植栽の美的な形態を引き出し、維持することが行われていた。各ガーデンでは、持続性の観点からベース植栽を一年草から宿根草中心へ切り替えており、植え替え作業も多くなっている。植栽管理の頻度は、春秋の植替時は4、5人のガーデナーで週4、5回程度、夏と冬はガーデナー数を1、2人落とし週2回程度である。灌水は夏季に週1回程度、他季節は植替え箇所の散水程度で維持されている。

b-2.工作物管理は、ハンギングポール、コンテナプランターなどの占用工作物の管理・設置を行っており、風鈴など季節の風物によるデコレーションも行われている。b-3.清掃は、植栽管理時の他、見回りと併せて行われる。レインガーデンの課題であるゴミによる目詰まりについては、機能不全に至るほどのゴミは出ていない状況である。

なお、維持管理のコストに関しては、2019年から行われている環境創造局「新横浜地区緑化育成業務」によって、修景に資する植栽管理、見回り巡回、清掃が支出されている。将来的には、広告事

業でこれを補うことが想定されている。

(3) 交流創出・人材育成

c-1. イベント運営では、「新横浜マルシェ」など街区全体のストリートを活用したイベント、沿道での親子向けクリスマスリースづくりワークショップ、全国区のハンギングコンテスト等、ターゲット設定に合わせた様々な規模のイベントの企画・運営が通年で行われ、来街者を誘致し、交流の場を創出していた。

c-2. 情報発信は、新横浜ガーデンシティPJが力を入れているものであり、街路にインフォメーション台を設置し、ガーデンマップ配布やアンケート回収、SNS発信を行っている。また、植栽管理にあたるガーデナーたちも「声をかけられたら作業よりコミュニケーション優先」との行動規範が共有されており、歩行者や住民とまちなかにおいて緑に関する様々な会話、相談が行われている。c-3. ボランティアプログラム運営では、ガーデニングに関心のある市民、住民に向けてプロによる植栽管理講習と植栽管理への定期的なボランティア受け入れが行われている。参加を通して、グリーン・ストリートの植栽管理の一端を担うようになった市民人材も出現している。c-4. グリーンガイドでは、ウォーキングを通してまちの緑の見どころ、実現過程などを解説するガーデンツアーリズムが行われ、来街者、住民のグリーン・ストリートへの関心、理解を深めていた。

5. おわりに

本研究では、新横浜を対象としてグリーン・ストリート・マネジメントの成立要因を実現過程、管理技術と方法から分析を行った。本研究の成果は以下の通りである。

1) グリーン・ストリート・マネジメントの成立過程では、地域主体がまず実施可能な小さな取り組みから活動を開始し、段階的に取り組み・活動の範囲を広げたことが成立要因の一つとして指摘できる。町内会の活動は、初動期において紙リサイクル活動の取り組みから開始し、まちのグリーン構想づくりを継続し、新横浜公園など関与可能な領域を広げた。整備に関しては、スタジアム開設・神奈川国体開催を契機にまずは緑化ポール、民地コンテナプランター設置から始め、資金を獲得しながら整備の種類や範囲が段階的に拡張されていた。ストリートマネジメントの体制については、まずは清掃活動を行うハマロードサポーター認定から始め、その後にマネジメント経験を蓄積し、道路協力団体として登録されるに至っている。

また、マネジメントの主体形成期においては、企業、住民、ワーカー、大学、環境団体、行政などに渡る多様な主体参画があったことも成立要因に挙げられる。多様な主体との協働・交流を通して、植栽や施設の管理技術を学び、実践する場があったことで、マネジメント技術が地域主体に蓄積され、より適切な活動体制を組織化することが可能となっていた。

さらに、マネジメント主体発展期においては、管理人材の形成・育成を支援する公民連携が行われたことがマネジメント成立の大きな要因となっていた。この公民連携には、維持管理業務プロボナール市発注による地域の維持管理主体の形成・育成、道路協力団体登録によるストリート経営主体としての新横浜ストリートマネジメント委員会の形成・育成、地域緑化活動支援助成金による民地での緑化整備支援を通じた、沿道の緑を管理する民間人材の形成・育成などが挙げられる。

2) グリーン・ストリート・マネジメントの技術と方法は、a. 経営、b. 維持管理、c. 交流創出・人材育成の3つに分類された。経営は、ストリートマネジメントの基本となる維持管理に加えて、景観の高質化、交流創出・人材育成を民間が進めるために必要なマネジメント技術の根幹であり、活動方針の策定・共有、事業運営・資金調達、組織運営での工夫が行われていた。特にグリーン・ストリー

ト・マネジメントを事業として運営することで、自主財源を確保し、景観の高質化へ向けた再投資を行い、グリーン・ストリートのストックの質を高める持続的なマネジメントが成立していた。植栽管理では、植栽タイプや季節によって管理頻度を調整しながら、ストリートごとの植栽目標を実現する細やかな管理が行われていた。植栽管理コストは、現状では行政により支出されていた。また、ターゲット選定に合わせたイベント企画・運営、歩行者が親しみやすい情報発信の工夫、歩行者とのコミュニケーションを促進する行動規範等のマネジメント技術によって、グリーン・ストリートを舞台とした様々な交流が生まれていた。さらに、関心層に向けては、植栽管理の担い手を形成・育成するボランティアプログラム、まちの緑に対する理解を深めるウォーキングガイドなどの方法が用いられ、グリーン・ストリート・マネジメントに参画する多様な主体の掘り起こしが行われていた。

以上に述べたように本研究では新横浜のグリーン・ストリート・マネジメントが成立した要因として、マネジメント技術・方法から3つの論点の項目とそれぞれの工夫を明らかにし、また、それが成立に至った経緯を明らかにした。

謝辞：新横浜町内会美化環境部の臼井義幸氏、青木洋一氏（奈良造園土木株式会社）、東邦レオ株式会社尾畑洋一郎氏にはヒアリング調査、資料提供のご協力頂いた。厚く謝意を表する。

補注及び引用文献

- 1) 国土交通省 (2020) : ストリートデザインガイドライン—居心地が良く歩きたくなる街路づくりの参考書— (バージョン 1.0)
- 2) 出口敦・三浦詩乃・中野卓編著 (2019) : ストリートデザイン・マネジメント : 学芸出版社
- 3) EPA : Learn About Green Streets <<https://www.epa.gov/G3/learn-about-green-streets>> : 2024.1.16 更新, 2024.9.10 参照
- 4) EPA : Green Streets Handbook < <https://www.epa.gov/green-infrastructure/green-street-handbook> > : 2021.更新, 2024.9.10 参照
- 5) 国土交通省 : グリーンインフラ<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_mn_000034.html> : 2016.3.1 更新, 2024.9.10 参照
- 6) 花井建太, 遠藤新 (2011) : 米国ポートランド市におけるグリーン・ストリート施策の研究 : 都市計画論文集 46 巻 (3), 655-660
- 7) 福岡孝則, 加藤慎久(2011) : ポートランド市のグリーンインフラ適用策事例から学ぶ日本での適用策整備に向けた課題 : ランドスケープ研究 78 巻 (5), 777-782
- 8) 滝澤恭平, 渡辺剛弘(2020) : ニューヨーク市ゴワナス運河流域における地域主体によるグリーンインフラ適用 : ランドスケープ研究 83 巻 (5), 661-666
- 9) 前田菜緒, 太田尚孝, 新保奈穂美(2023) : 京都市における雨庭の導入・整備プロセスと維持管理体制の実態に関する研究 : 都市計画報告集 22 巻(1), 20-23
- 10) 野原卓, 釣祐吾(2016) : 街路・沿道連携型ストリートデザインマネジメントの展開プロセスに関する研究 : 都市計画論文集 51 巻 (3), 611-618
- 11) 野原卓, 宋俊煥, 泉山壘威, 木原一郎(2021) : 都心部におけるストリートマネジメント実現に向けての主体形成及び醸成に関する研究 : 都市計画論文集 56 巻(1), 201-216

(2024. 9. 28受付、2025. 3. 28受理)